

フランスの中の日本 30 選



モレブリエ東洋公園

— 目次 —

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

54	エミール・ギメが見た明治の日本（2021年5月6日）	1
63	19世紀の日本人が見たパリ（2021年6月8日）	3
150	在ヌメア領事事務所（2023年3月2日）	5
191	パリ・イリュストレ 日本特集号（2023年9月5日）	7
193	大聖堂の祭壇に描かれた日本人（2023年9月12日）	9
196	1889年パリ万国博覧会と日本（2023年9月21日）	11

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

64	KATAGAMI（型紙）（2021年6月10日）	13
83	海を渡った「IMARI」（伊万里焼）（2021年10月14日）	15
109	フランスの伝統工芸と日本の現代アニメの出会い（2022年4月28日）	17
111	根付（2022年5月12日）	19
121	欠けたところをさらに美しく－金継ぎ（2022年7月21日）	21
127	美術品の保存と修復を支える和紙（2022年9月8日）	23
136	団扇と扇子（2022年11月10日）	25
137	北斎漫画（2022年11月17日）	27
153	陶磁器のジャポニスム（その1）（2023年3月23日）	29
154	陶磁器のジャポニスム（その2）（2023年3月30日）	31
167	真珠の永遠の輝き（2023年6月13日）	33
173	漫画の始まり（2023年7月4日）	35
181	フランスの浮世絵師－アンリ・リヴィエール（2023年8月1日）	37
197	マリー＝アントワネットが夢見た日本（2023年9月26日）	39

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

27	国際化する「抹茶（Matcha）」（2021年1月21日）	41
45	おにぎりの歴史と未来（2021年4月6日）	43
172	蕎麦とガレット（2023年6月29日）	45

4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

108	ジベルニーに咲く日本の牡丹（2022年4月21日）	47
112	日本のアイリス - ハナショウブとシャガ（2022年5月19日）	49
124	モレブリエ東洋公園（2022年8月18日）	51
163	ヨーロッパ人を魅了した日本のユリ（2023年5月30日）	53

5 フランスを愛した日本人（人物編）

76	グレー=シュル=ロワンの黒田清輝通り（2021年8月26日）	55
88	レオナール・フジタが暮らした最後の家（2021年11月18日）	57
126	グラン・モランを描いた佐伯祐三（2022年9月1日）	59



ジベルニーの牡丹

「フランスの中の日本」は、2020年10月16日から2023年12月28日まで、224回にわたって在フランス日本国大使館のSNSに投稿した文化コラムです。

SNS投稿した全ての記事は、以下のリンクからご覧いただけます。

アーカイブ：[文化コラム「フランスの中の日本」](#)

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

54 エミール・ギメが見た明治の日本（2021年5月6日）

パリにあるギメ東洋美術館を創設したエミール・ギメ（1836-1918）は、リヨンの実業家の息子として生まれ、若い頃から異なる文明や宗教に関心を持っていました。父親から引き継いだ工場を経営しながら、1867年のパリ万国博覧会や1873年にパリで開催された第一回国際東洋学者会議へ出席したことで日本の情報に直接触れる機会を得ました。そして、1876年にフランス政府の「極東宗教学術調査使節」として、日本、中国、インドをめぐる世界一周の旅に出ました。ギメは、画家のフェリックス・レガメを伴って、1876（明治9）年に2か月間、日本に滞在しました。



Emile GUIMET
エミール・ギメ

ギメは、日本滞在中に見聞して体験したことや訪れた土地にまつわる歴史や民間伝承を、レガメの挿絵入りで「日本散策」(Promenades japonaises) 二巻にまとめました。私は、後編に当たる「日本散策 東京-日光」(Promenades japonaises Tokio-Nikko) の現代日本語訳を読みました。この本では、19世紀末の明治の日本人の行動や宗教観について、エジプトやインドといった他国との比較も交えながら、ギメ独自の興味深い分析がなされています。フランス人の目を通した当時の日本人の描写を読みながら、150年近く前の日本にタイムスリップしたような気分になりました。



Nihonbashi à Tokyo
à l'époque de Meiji (1868-1912)



Ueno à Tokyo
à l'époque de Meiji (1868-1912)

著書の中で、ギメは次のように語っています。

「日本は、自国の風俗に対し、あまり自信を持っていない。日本人の力となり幸せの源となってきた多くの風俗、制度や考え方をあまりにも性急に一掃しようとしている。だが、もしかしたら日本が自分たちを見直すときが、いつの日か訪れるのではないだろうか。私は日本のためにそれを願っている。」

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

ギメの鋭い観察力に驚きました。当時の日本は、日本よりも外国の文化が優れていると考えて日本の伝統文化を捨て去ろうとし、多くの美術品や仏像が海外に流出しました。ギメの手に渡った日本の美術品は、幸いにもギメ東洋美術館のコレクションとして現代に引き継がれています。次回ギメ東洋美術館を訪れる際には、ギメの日本に対する思いを想像しながら見学したいと思います。



1 日本とフランスの出会い（歴史編）

63 19世紀の日本人が見たパリ（2021年6月8日）

明治（1868–1912）政府は近代化を進めるために、欧米諸国に使節団を派遣しました。岩倉具視を特命全権大使とする岩倉使節団は、1871（明治4）年から1873（明治6）年の1年10か月をかけて、アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ドイツなど12か国を訪問する世界一周の旅をしました。この使節団派遣の目的は、① 江戸時代後半

（1840–1850年代）以降に条約を締結した国に対する国書の提出、② ①で締結した不平等条約改正に向けた予備交渉、③ 西洋文明の調査でした。しかし、最初に訪問したアメリカで条約改正の予備交渉に失敗したことから二つ目の目的は諦めて、訪問先の国家制度の調査と産業技術や文化の視察を行いました。



De gauche à droite, KIDO Takayoshi, YAMAGUCHI Masuka, IWAKURA Tomomi, ITO Hirobumi, OKUBO Toshimichi
左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

使節団は、1872年12月から約2か月間をパリで過ごしました。当時のティエール大統領を表敬し、凱旋門、ノートルダム大聖堂、軍の学校や施設、建築や鉱山の学校、ゴブラン織やセーブル焼の製作所、チョコレートや香水の製造場、国立図書館、病院など数多くの場所を視察しました。一行は、ベルサイユ宮殿やフォンテーヌブロー城にも足を伸ばしました。

使節団の公式報告として、随員の一人であった久米邦武が編纂した「米欧回覧実記」が1878（明治11）年に刊行されました。これは、全百巻を五編にまとめた百科事典のような詳細な記録で、銅版画による美しい挿絵が添えられています。私は、19世紀の日本人が、当時のフランスをどのように観察したのか知りたくなり、現代日本語で書かれた解説書の助けを得ながら「米欧回覧実記」のフランス滞在部分の記録を読みました。第三編は、「フランスは、ヨーロッパの最も開けた中央部分にあって、様々な産物が行き交う文明進展の中枢である。」という一文から始まります。パリの街並みについては、凱旋門からコンコルド広場まで一直線に伸びるシャンゼリゼ通りがあり、夜にはガス燈の光が輝いていたことを述べた上で、「（コンコルド広場にある）オペリスクの東にはイタリア大通りがあり、五階から七階建ての大きな商店が立ち並ぶパリで一番美しい通りである。」と記しています。ここで述べられている場所は、現在のオペラ座（オペ

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

ラ・ガルニエ）付近です。当時はまだオペラ座はありませんでしたが、当時から賑わう界隈であったことがわかります。ヨーロッパ貴族社会で使われる言葉と貴婦人のファッションや髪型といった流行は、常にパリから生まれていることも記しています。



Obélisque dans la Place de la Concorde à Paris
巴黎「コンコルド」苑ノ「オブリスキ」塔
© musée KUME/久米美術館



Les Grands Boulevards à Paris
- le plus beau quartier de Paris -
巴黎「ブールヴァル」大通り〈巴黎第一ノ美街〉
© musée KUME/久米美術館

この記録では、ナポレオン三世がパリ近郊に工場を誘致して労働者向けの住宅を建設し、労働者階級の生活水準の向上を目指した社会福祉政策を評価しています。また、ヴァンセンヌ城に隣接する兵舎を見学した際には、兵舎は粗末であっても誇りを持って任務に当たる気概のある将校と出会って感激したことも書かれています。

使節団の一行は、パリの華やかな街並みを見ただけではなく、日本の新たな国作りに必要な政策や人材についても学んだことが、「米欧回覧実記」の記録から読み取ることができます。

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

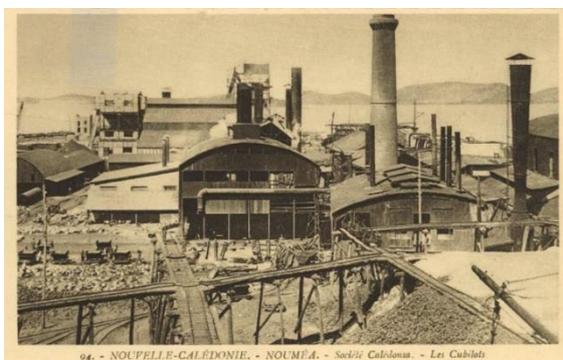
150 在ヌメア領事事務所（2023年3月2日）

フランスにおける日本政府の在外公館は、フランス本土には、パリにある大使館（※1）、在ストラスブール総領事館、在マルセイユ総領事館とリヨン領事事務所があります。これらに加えて、2023年1月には、パリから16,000キロ離れたニューカレドニアのヌメアに、新たに領事事務所が開設されました。



太平洋に浮かぶニューカレドニアは、美しい海と景色を求める日本人にとって人気の高い観光地として知られています。その証拠に、新型コロナウイルス感染拡大前の2019年は、ニューカレドニアを訪れた観光客の合計約13万人のうち、約22,000人が日本人でした。これは、フランス本土（約42,000人）、オーストラリア（約26,000人）に次いで、第三位を占める数です（※2）。日本とニューカレドニアの時差が2時間しかないことも、日本人観光客にとっては魅力の一つです。

観光だけではなく、日本とニューカレドニアは、歴史的にも深いつながりがあります。1892年、島内のティオにあるニッケル鉱山で働くために、日本から最初の移民となる599人がニューカレドニアに到着しました。しかし、過酷な労働環境と生活苦のため、多くの移民は5年の任期を満了する前に、



逃亡や早期の帰国をしました。そこで、フランス政府との間で仲介をしていた日本の移民会社が、フランス政府から、日本人移民はヨーロッパ人と同様の立場とする同意を取り付け、その後7回にわたって移民が派遣されました。ニューカレドニアに渡った日本の移民は、合計5,581人を数えました。

また、1941年には日本軍によるハワイ真珠湾攻撃によって在留邦人約1,100名がニューカレドニアから追放され、オーストラリアの捕虜収容所に拘留された後、日本に強制送還されるという悲劇もありま

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

した。2022年11月には、ティオにある日本人墓地で、日本人移民130周年慰霊式典が行われました。

ニューカレドニアには、3つの日本の都市と姉妹都市提携をしている自治体があります。ラ・フォア市は山形県鶴岡市と、イル・デ・パン（île des Pins）は宮城県松島町と、リフー（Lifou）島は宮城県利府町と姉妹都市提携を結んでいます。イル・デ・パンを直訳すると松島になり、リフーと利府の発音が似ていることが縁になっています。

ニューカレドニアには、毎年約2万人もの日本人観光客が訪れ、歴史的な経緯から現在も約1万人の日系人の方が生活されています。日本にとって重要なニューカレドニアに事務所を設置することは、日本政府にとって長年の願いでした。これまでは、歴代の名誉領事、ニューカレドニア日本親善協会、ニューカレドニア日本人会など多くの方々が、日本とニューカレドニアの交流発展に尽力してくださいました。在ヌメア領事事務所の開設とともに、日本とニューカレドニアの関係がさらに深化することを願います。

※1 52 [在フランス日本国大使館](#)

※2 ISEE (Institut de la Statistique des Etudes économiques Nouvelle-Calédonie) 統計。2019年にヌメア国際空港から入島した観光客数は、仏本土から42,207人、オーストラリアから25,732人、日本から21,670人を含めて合計130,459人。



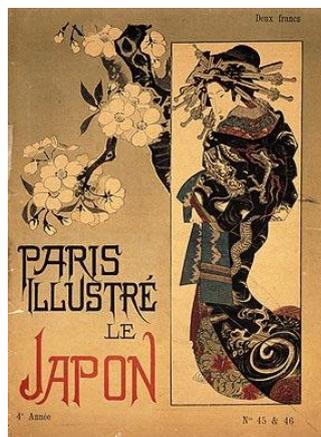
1 日本とフランスの出会い（歴史編）

191 パリ・イリュストレ 日本特集号（2023年9月5日）

リヨンにある印刷博物館では、印刷物の歴史や印刷技術の発展を紹介する展示をしています。展示品の中で、パリ・イリュストレの1886年5月号の日本特集の表紙を見つけました（写真右）。パリ・イリュストレとは、1873年から1920年までフランスで発行された挿絵入りの雑誌です。1886年5月には日本特集号が生まれ、パリで活躍していた美術商の林忠正が日本について20ページを超える文章を書きました。



表紙には、喜多川歌麿による浮世絵「江戸の花浄瑠璃娘」が用いられています。特集号にはカバー表紙もあり、こちらには溪斎英泉作の浮世絵「雲龍打掛の花魁」が使われました（写真左下）。これを模写して、フィンセント・ファン・ゴッホが、1887年に「ジャポネズリー花魁」を描いたことは有名です（中央下）。アムステルダムにあるゴッホ美術館には、ゴッホが英泉の浮世絵を写し取った紙が残されています（写真右下）。



© Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

日本特集号に掲載された林忠正の文章は、フランス語で初めて日本について包括的に説明したものでした。この特集号の全体は、フランス国立図書館の電子図書館ガリカで閲覧することができます。内容は、日本の歴史、気候風土、大名社会、ハラキリ、日本人の性格、宗教、教育、住居、衣服、食事、結婚、劇場と観劇、日本美術の13項目に分かれています。随所に浮世絵やイラストが挿入され、これらの絵も当時の日本を理解する助けになっています。

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

この号が発刊された1886年は、日本では徳川家の将軍が実権を支配していた江戸時代から、明治という天皇を中心とする新しい国家体制に移行して20年余りが経った頃です。明治時代になって、近代国家に向けて日本の社会は大きく変化しました。林忠正は、当時の日本を理解させるために、江戸時代の習慣も記述しました。本文の中から、現在とは異なる日本の様子をいくつかご紹介します。

大名社会の項で、忠正は、大名とその下の侍が支配していた社会構造を説明した上で、当時は旧武士階級が政府の役人となり、革新的なグループを構成して文化を牽引していると述べています。また、ハラキリの項を設けて、切腹とは高貴な人物の厳粛な行為であると説明し、そのやり方を記述しました。明治時代になって、制度上の武士はいなくなりましたが、ある日を境に世の中が一変したわけではありません。忠正の文章から、江戸時代は武士であった人たちが、新たな時代に相応しい国造りを行っていたことを伺い知ることができます。

日本人の性格の項では、忠正は、日本人に共通する点として、愛国心、親孝行、家に対する忠誠、礼儀、忍耐、秩序、清潔、芸術観を挙げています。また、日本人は自尊心が高く、与えられたミッションは、命をかけてもやり遂げ、その性格は悪人の中にもあるとして、次のようなエピソードを書いています。1879年に江戸で大火事が発生した際、刑務所の所長が扉を開けて、囚人たちに対して、「今夜はお前たちの命を助けるために自由にするが、明朝にはここに戻ることを約束しなさい。」と言い、翌日には全員刑務所へ戻って来たという話です。現代の感覚では信じられないような話ですが、身分制度があった時代には、それぞれの立場に相応しい行動をすることが当然のことであったのかもしれない。

忠正が残した文章は、130年以上前の日本人の行動や考え方を知る貴重な史料になっています。

※博物館の展示は、変更される可能性があります。

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

193 大聖堂の祭壇に描かれた日本人（2023年9月12日）

フランス北部のリールにあるノートルダム＝ド＝ラ＝トレイユ大聖堂を訪れたとき、大聖堂内にあるサクレ＝クール＝ド＝ジェズ礼拝堂（写真右）で珍しいものを見つけました。祭壇の中央部に横長のモザイクがあり、右側には着物姿の四人の人物が描かれています（拡大図は右下）。大聖堂の解説によると、四大陸と四つの世代を代表する人物と、その背景にはその大陸で育つ植物が描かれ、神が全世界を創造されたことを表現しているとされています。また、モザイクの下辺には、ラテン語で《*Omnes gentes venient et adorabunt coram te, Rex gloriae, Christe*》（「全世界が栄光の王である主の下に来て、主の前にひれ伏す」という意味。）とあります。右から、笠をかぶった老人の男性、大人の女性、少年、大人の男性と背景には竹が描かれ、四人の人物は日本人で、アジア大陸を表していると考えられます。私はこの絵を見て、「信徒発見」という歴史的な事実を思い出しました。



1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによって、日本に初めてキリスト教が伝えられました。キリスト教の布教とともに神社や寺院を破壊する事件が続いたことから、宣教師に対する弾圧が始まりました。そして、江戸幕府（1603-1868）は禁教令を發布して、キリスト教の宣教を禁止しました。江戸幕府は、寺譜制度を設けて全ての人はいずれかの寺に属することを義務付け、キリスト教の信徒（キリシタン）は棄教することが求められました。しかし、中には密かに信仰を守り続けたキリシタンがいました。彼らは、「隠れキリシタン」と呼ばれ、村の役人をカムフラージュするために、神道の儀式のように毎朝祭壇に炊いたご飯と酒をお供えし、仏様である観音様の像を聖母マリア像に見立てたマリア観音を拝み、オラショと呼ばれた古い祈祷書を仏教のお経のように唱えて、信仰を継承していました。

1858年に日仏修好通商条約が締結された後、パリ外国宣教会の宣教師のベル

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

ナール・プチジャン神父（1829-1884）は、1864年に長崎に赴きました。長崎の外国人居留地に住むフランス人のための教会建築が許可され、1865年に大浦天主堂が完成しました。プチジャン神父は、日本人にも教会を開放し、自由に見学できるようにしました。なぜなら、プチジャン神父は、16世紀末からキリスト教弾圧が続いた日本でも、密かに信仰を持ち続けている人がいるのではないかと期待を持っていたからです。

1865年のある日、大浦天主堂を訪れた数名の女性が、「私たちもあなたと同じ信仰を持っています。聖マリア像はどこにありますか。」と神父に尋ねました。天主堂に姿を見せたのは、「隠れキリシタン」でした。プチジャン神父による「信徒発見」はヨーロッパに伝えられ、大きなニュースとなりました。その後、キリシタンだと名乗る者が次々と現れ、プチジャン神父は彼らにカトリック信仰を教えました。大浦天主堂（写真右）は1953年に日本の国宝に指定され、この天主堂を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、2018年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。



リール大聖堂の年表によると、大聖堂は1854年から建設が始まり、1908年に礼拝堂が完成しました。大聖堂の建設中に、信徒発見のニュースがフランスに伝えられたと考えられます。サクレ=クール=ド=ジェズ礼拝堂を作った人が、信徒発見のニュースを聞いてこれらの日本人を描いたという証拠はありません。しかし、イエス・キリストに向かって拝む着物姿の人々の姿は、信徒発見によって信仰を取り戻した信仰者の姿に重なって見えました。

1 日本とフランスの出会い（歴史編）

196 1889年パリ万国博覧会と日本（2023年9月21日）

前回、セーヌ川沿いのブキニストで見つけた約 100 年前の新聞に掲載されていた日本に関する記事を取り上げました。ブキニストには、1889年に開催されたパリ万国博覧会の週刊誌もありました（写真右）。日本は、1867年の第二回パリ万国博覧会に初めて参加し、美術や工芸品を出品して日本に対する関心を高めました。その後、フランスではジャポニスムブームが起きましたので、1889年の第四回パリ万博では、日本が行う展示に対する期待や関心があったと考えられます。この週刊誌では、日本についてどのような情報が伝えられたか、関心を持って読んでみました。



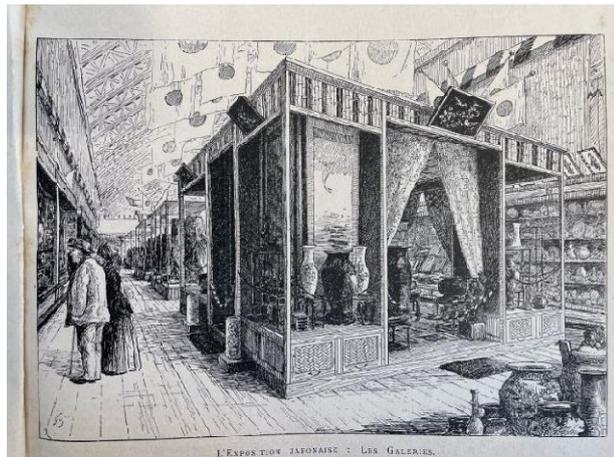
1889年のパリ万博は、5月5日から10月31日まで開催されました。1889年7月20日付けの第21号では、3枚の盆栽の版画とともに1ページ半にわたって盆栽について説明しています。トロカデロ広場に日本庭園が設けられ、日本から来た庭師の畑和助が活躍したことを以前にご紹介しました。この週刊誌の記事には、畑和助の名前は出てきませんが、畑が手入れをしたと考えられる盆栽を見たフランス人の評価が述べられています。記事の筆者は、盆栽は40から60センチに刈り込まれて小さいものの、70年も90年も経過していることに驚きを示しています。また、近づいてみると老いた木であることが分かるものの、雨嵐との戦いに勝利して生き抜いてきた力強さもあると述べています。そして、小さくかつ均整の取れた形を維持するといった具体的な手入れの方法も説明しています。そして、100年、150年と盆栽を育てるためには、親から子へ、子から孫へと代々継承していく必要があり、盆栽は忍耐がなせるものだと述べています。筆者は、実際に盆栽の展示を見ることができない読者のために、展示されている盆栽の大きさ、木の種類や樹齢を解説しています。記事とともに、展示作品の中から選ばれた3つの盆栽の版画が掲載されています。右の写真はそのう



1 日本とフランスの出会い（歴史編）

ちの1枚で、樹齢150年の松の盆栽です。最後に筆者は、「小さく、デフォルメされ、奇妙なものを好むことは何ら驚くことではなく、そのような傾向はすでに日本の建築や美術にも表れている、日本人は大きく巨大なものを理解することも探し求めることもせず、何でも小さくして、自然までも自らの手におさめている。」と述べています。今ではフランス人にも人気の高い盆栽ですが、盆栽に見慣れていない19世紀末のフランス人筆者による観察は、日本とフランスの美意識の違いを理解するものとして、とても興味深いものです。

1890年1月15日付けの第70号では、版画とともに日本の展示会場について説明した記事が、展示会場の内部の様子を描いた版画とともに掲載されています。記事では、日本の展示会場の設計を依頼されたフランス人建築家の苦労話がかかれていています。建築家は、「できる限りの資料を集め、神経をすり減らすほどの試行錯誤、うんざりするほどの研究と果てしない調査の後に、フランス語を5つしか知らない日本代表団の委員たちに下絵を見せたら、彼らは笑いながら頭を振って分からせるような態度で、そうではないと述べ、全て最初からやり直さなければならなかった。」と書いています。そして、筆者は、建物の外観も内装もいかに良くできているのかと、建築家を擁護する論調で続けています。本格的な交流が始まってまもなく、お互いの文化を知るための情報が少なかった時代で、日本人とフランス人のコミュニケーションの難しさを伝えるエピソードです。



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

64 KATAGAMI（型紙）（2021年6月10日）

フランスに来て、美術館に KATAGAMI が展示されているのを見て驚きました。型紙は、染色に使う道具であって、展示する美術品だとは思っていなかったからです。

型紙とは、着物の生地に柄や文様を染める工程で用いられる道具です。型紙は、柿渋（渋柿の未熟な果実を压榨・発酵して作られる抽出液で、防水効果がある。）を使って美濃和紙を加工した紙（型地紙）に、職人が独特の彫刻刀で多彩な図柄を彫ったものです。細かな模様を彫るのには、職人の熟練の技を必要とします。

型を使って色を染めるときは、模様を掘った型紙の上に糊を置き、糊が乾いた後に型紙を外して糊のない部分に色を挿していきます。色挿しが終わって糊を落とすと糊が置かれた場所は白く残り、型紙の模様の部分だけが染色されます。模様の題材は、草花、水の流れ、小鳥や魚などの身近にある自然で、反復模様となっています。

型紙は、一定の回数を使用すると新しい型紙と交換されますので、古い型紙は廃棄されました。19世紀後半に日本にいたヨーロッパ人が、使われなくなった型紙を見つけて持ち帰り、当時の装飾デザイナーが、型紙の模様を工芸品に取り入れました。ヨーロッパ人は型紙の使い方が分からなかったために、模様に注目したのかもしれませんが。型紙の模様から生まれた新しいデザインは、アール・ヌーボーを生むきっかけになりました。日本では廃棄されていた型紙が、ヨーロッパ人のおかげで新たな芸術を生む道具となったのは興味深いことです。



musée du quai Branly/ケ・ブランリ美術館



musée des Arts Décoratifs/装飾芸術美術館



Un peigne influencé par un motif du katagami 型紙のデザインから影響を受けた櫛

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

フランスに来る前は、型紙を使って染め上げられた布地の美しさしか注目していませんでしたが、フランスの美術館に展示された型紙を見たおかげで、型紙そのものの芸術性に気付かされました。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

83 海を渡った「IMARI」（伊万里焼）（2021年10月14日）

セーブル陶磁美術館、ギメ東洋美術館、パリ装飾芸術美術館など東洋の陶磁器を収蔵する美術館で、日本の陶磁器を見ることができます。この中には、17世紀に九州の有田（現在の佐賀県有田町）で作られた磁器があります。なぜ、フランスにあるいくつもの美術館で、日本の磁器を見ることができるのでしょうか。

磁器は中国で生まれたもので、その起源は9世紀頃に遡ると言われています。磁器は硬く、1200度以上の高温で焼成して作られ、磁器を作るための粘土にはカオリンという特別な鉱物が必要です。日本では、17世紀に朝鮮半島から渡来した陶工たちによって、磁器の原料となる良質な陶石が発見され、有田（現在の佐賀県有田町）で日本初となる磁器が誕生しました。この頃、日本は鎖国をしていましたが、オランダの東インド会社によって、有田やその周辺で作られた磁器はヨーロッパや東南アジアへ輸出されました。これらの磁器は、伊万里港からヨーロッパへ運ばれたことから「伊万里焼」（IMARI）*と呼ばれました。

当時のヨーロッパではまだ磁器を作ることができなかつたため、日本や中国で作られた磁器をコレクションすることは、王侯貴族のステータスとなりました。高価な磁器は「白い金」とも言われて珍重されました。中国では17世紀半ばに起こった内乱によって陶磁器の輸出がほとんどできなくなりました。そこで日本がヨーロッパからの注文を一手に引き受けることとなり、伊万里焼の輸出が本格化しました。現在フランスの美術館で見ることができる日本の磁器は、このようにして海を渡ったものなのです。



17世紀前半に作られた初期の伊万里焼は、色付けは藍色のみの「染付」（そめつけ）というシンプルな図柄でした。しかし、17世紀半ば以降になると赤、青、黄、緑、紫といった複数の色を使った「色絵」が作られるようになりました。中でも人気を博したのが「柿右衛門様式」と言われるものです（写真）。乳白色の素地に、余白を残した絵画的な図柄で色絵を施すのが特徴です。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

しかし、17世紀の終わりになると、中国の陶磁器の輸出が再開し、伊万里焼は中国製品との価格競争に陥りました。そこで、職人の高度な技術を必要とし、手間とコストがかかる「柿右衛門様式」から、コストを抑えて量産化を図るために、金彩と色絵を用いた豪華な「金欄手（きんらんで）様式」の輸出に力を入れるようになりました。日本の富裕層向けに作られたものは主に食器でしたが、ヨーロッパ向けには室内装飾品として城や宮殿に飾るための大型の皿や壺が作られました。



有田で作られた磁器は、海を渡って IMARI の名でヨーロッパに知られ、ヨーロッパからの需要に応えるために更なる発展を遂げました。

* 江戸時代に有田やその近辺で作られた磁器を「古伊万里」と言うのに対し、明治以降に佐賀県有田町で生産される磁器は「有田焼」、同県伊万里市で生産されるものは「伊万里焼」と称して区別している。現在でも有田と伊万里は、日本を代表する磁器の産地である。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

109 フランスの伝統工芸と日本の現代アニメの出会い（2022年4月28日）

3月25日、パリから約400キロ南に位置するオービュッソン(Aubusson)で、新たなタペストリーがお披露目されました。そのタペストリーは、宮崎駿監督のアニメ映画「もののけ姫」の一場面を描いたものです。フランスの伝統的な技術を使って、日本の現代のアニメの一場面を再現する素晴らしいプロジェクトが幕を開けました。

オービュッソンのタペストリーは600年の歴史を持ち、その技術は2009年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。2016年に開館した国際タペストリーセンターは、文化的な遺産のタペストリーの修復、保存と展示や職人の育成を行っています。現代作品の制作にも力を入れており、2019年にスタジオジブリと正式に提携して、「オービュッソンのタペストリーで織る宮崎駿の空想世界」と題したプロジェクトを立ち上げました。これは、宮崎駿監督のアニメ映画4作品から5つの場面を選び、5枚のタペストリーを制作するものです。



一作目となる「もののけ姫」の中から選ばれた森を描いたシーンの作品は、5m×4.6mの大きさで、色鮮やかで森の奥行が感じられ、本当に光が差しているかのように見えます。平面の織物とは思えません。近くで見ると、複雑な色のグラデーションを使い、場所によって異なる織り方をすることで、立体感を出していることが分かります。約一年をかけてこの作品を織りあげた職人の緻密で根気のいる作業は、称賛に値します。

二作目となる「千と千尋の神隠し」のタペストリーは、本年末の完成を目指して制作が進んでいます。このタペストリーを作るために、500色もの糸が使われるそうです。その後は、「ハウルの動く城」から二作品と「風の谷のナウシカ」から一作品が制作され、2023年末に全ての作品が完成する予定です。二作目以降の作品の完成も楽しみです。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）



このプロジェクトを通じて、日本とフランスの宮崎監督のアニメ映画のファンが、オービュッソンとそこで作られるタペストリーを知ることになるでしょう。宮崎アニメを知らないフランス人にとっては、宮崎アニメを通して描かれる日本の文化や考え方を知るきっかけになるかもしれません。多くの日本人にとって、タペストリーと言えば、中世の城か美術館で観るヨーロッパの織物で、色褪せたものを想像すると思います。このように色鮮やかで、アニメの場面を描いた作品は、日本人のタペストリーに対するイメージを変えるものです。タペストリーとアニメという意外な出会いは、オービュッソンのタペストリーに新たな価値を与えるだけでなく、日本とフランスの文化交流の発展を大きく後押しするものとなるでしょう。

オービュッソン国際タペストリーセンター <https://www.cite-tapisserie.fr/> (日本語)



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

111 根付（2022年5月12日）

パリのギメ東洋美術館の別館には、本格的な茶室があることを以前にご紹介しました（*1）。パリ市内に、デヌリ美術館と呼ばれるもう一つの別館があり、ここには素晴らしい根付（ねつけ）のコレクションがあります。

根付とは、江戸時代（1603-1868）に使われた留め具のことです。ポケットのない着物姿で印籠（薬などを携帯するための小さな入れ物）や煙草入れなどを持ち運ぶときに、それらと根付を紐で結び、帯と着物の間にその紐を挟みました。印籠や煙草入れが下がっても根付が帯に引っかかるため、ぶら下げている物の落下を防ぐことができました。

根付は、1センチから数センチ程度の小さなものです。材質は木材や象牙が使われることが多いですが、金属、ガラス、漆、鹿角など様々な素材で作られました。当初は印籠等の落下防止という機能を果たすためのものとして使われていた根付ですが、19世紀頃から装飾性が高くなりました。根付師という専門の職人が誕生し、ミニチュアの彫刻作品として発展していきました。明治時代（1868-1912）になると欧米文化を取り入れるために洋装化が進み、根付の需要が減りました。しかし、この根付の芸術性は欧米人を惹きつけ、多くの根付が輸出され、現在では日本以外で根付のコレクションが残されているところがあります。

デヌリ美術館は、19世紀後半に劇作家として活躍したアドルフ・デヌリの妻のクレマンس・デヌリ（Clémence d' ENNERY）が蒐集した日本と中国の美術品のコレクションを展示しています。クレマンスは、当時流行していた浮世絵には関心を示さず、約2500点にのぼる根付を始めとする工芸品を熱心に買い集めました。クレマンスは、コレクションを飾るために邸宅を建て、美術品を展示する棚を特注で職人に作らせました。邸宅内には、数多くの



Sources : ColBase

(<https://colbase.nich.go.jp/>)

ColBase

(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/H-289?locale=ja) をもとに作成



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

美術品を収めた棚が所狭しと並んでおり、動物、人物、だるまなど様々な題材の根付を見ることができます。この他には、漆器で作られた洋櫃（ようびつ）（*2）や陶器もあります。クレマンズの死後、クレマンズのコレクションは邸宅とともに国へ遺贈され、ギメ東洋美術館の一部となりました。



建物と展示品の保護の観点から、デヌリ美術館は限られた機会にしか見学することができませんが、収集された品々だけでなく展示方法にもコレクターのこだわりを見ることができる貴重な空間です。



※ デヌリ美術館の見学は事前予約制

ギメ東洋美術館公式サイト <https://www.guimet.fr/musee-dennergy/histoire-du-musee-dennergy/>（仏語）

* 1 101 茶室の秘密

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100310433.pdf>

* 2 72 南蛮貿易と漆器

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545670.pdf>

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

121 欠けたところをさらに美しく一金継ぎ（2022年7月21日）

最近、日本大使館に、金継ぎができる職人を紹介して欲しいというお問い合わせをいただくことがあります。一昨年、パリにある装飾芸術美術館で開催された展覧会で、金継ぎが施された茶碗が展示されました（※）。金継ぎは、フランスではまだあまり知られていないことから、展覧会で紹介されたと考えていましたが、一般の方に金継ぎという言葉が知られていることに驚きました。調べてみると、フランスで金継ぎのワークショップが頻繁に開催されていることがわかりました。そこで、今回は金継ぎをご紹介します。

「金継ぎ」とは、ヒビが入ったり、一部が欠けてしまった陶磁器の破損部分を漆で接着し、金粉を施す修復技法のことです。「金継ぎ」と言いますが、金は装飾に過ぎず、実際に陶磁器を接着しているのは漆です。金継ぎをすると、破損前の形に戻るだけでなく、接着した部分は金が施された装飾となり、新たな美しさが生まれます。破損した部分が分からなくなるように修復するヨーロッパとは、全く考え方が異なる修復方法です。



フランスでは、陶芸作家で金継ぎを行っている方がいらっしゃいます。陶芸作品の装飾技法の一つとして金継ぎが用いられるようになり、その美しさがフランスで広く知られるようになったのではないかと考えられます。しかし、金継ぎは、漆の接着効果を用いた修復技法ですので、本来は陶芸のための技法ではなく漆芸（漆を使った技法）の一つなのです。

漆を接着剤として使った修復は、約9000年前の縄文時代の土器にも見られます。室町時代（14-16世紀）に茶道の発展とともに、金粉を使った金継ぎが広く行われるようになりました。当時の茶の湯では、現在の中国や朝鮮半島から作られた茶碗が珍重されていました。それらの茶碗は大変貴重なものでしたので、当時の人たちは、茶碗が欠けると、修理して再び使いたいと考えました。日本のもったいない精神が表れています。当時は、蒔絵など漆を使った工芸品の技術が普

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

及していました。さらに、茶の湯では、均一ではなく、完璧でもなく、ゆがみや傷があったとしても、ありのままの姿を受け入れる考えがありました。このような時代背景があったことから、破損した部分を隠すのではなく、敢えて目立たせて芸術性を高めた金継ぎが広く用いられるようになったと考えられます。日本でも、著名な陶芸作家の作品の中には、後世に金継ぎで修復されて美術館に収められているものがあります。



野々村仁清作 錆絵山水図水指 17世紀
(20世紀前半に六角紫水によって修復)
Pot à eau fait par NONOMURA Ninsei au 17e,
restauré par ROKKAKU Shisui au 20e
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

実は、日本でも金継ぎはちょっとしたブームになっています。手間暇をかけて修復することは、物を大切にしたいという思いを表すもので、現代の大量消費社会を見直す動きに合致しています。また、自宅で簡単に金継ぎができるキットが販売され、コロナ禍によっておうち時間が増えたことで、金継ぎを楽しむ人が増えました。日本人とフランス人が、「金継ぎ (Kintsugi)」という言葉だけではなく、愛着のあるものを長く大切に使う心も共有していくことができたら、嬉しく思います。

4 装飾芸術美術館「Luxes」展

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100158242.pdf>

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

127 美術品の保存と修復を支える和紙（2022年9月8日）

先日、フランス産の材料を使って和紙作りをするフランス人夫妻をご紹介します（*）。彼らは、和紙の特徴は、軽くて丈夫なことだと教えてくれました。実は、和紙は、ルーブル美術館を始めとする世界の美術館で、美術品の保存や修復のために使われています。ルーブル美術館グラフィックアート部門の修復工房を訪問して、和紙が美術品の修復に使われる様子を見学させていただきました。

グラフィックアート部門は、デッサンや版画など紙を使った作品を所蔵していることから、作品の保存や修復のために和紙を使っています。作品を閲覧するときに直接作品に手を触れないようにするために、作品を和紙に貼り付けて縁を作ります。また、作品の傷んだ部分に和紙を張って補強することもあります。世界の美術館では1980年代から和紙を使い始め、1990年代以降は美術品の修復に和紙を使うことが一般的になったそうです。



ルーブル美術館では、越前和紙と高知県で生産されるひだか和紙（写真右）を使っています。前者は、人間国宝の岩野市兵衛さんが作る手漉きの和紙が選ばれました。後者は、機械で作る和紙ですが、世界で最も薄い紙と言われている



© ひだか和紙/HIDAKA WASHI

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

ます。なぜ、和紙が美術品の修復に向いているのか尋ねると、和紙の材料となる植物の繊維が長く、手漉き和紙を作るときには、紙の材料を簀桁（すけた）と呼ばれる道具の上で前後左右に揺らすため、長い繊維が絡まって丈夫になるのだそうです。世界各国で紙が作られていますが、繊維の長い植物を使った紙を生産するのは、日本と韓国に限られるとのこと。紙に糊を塗布するときには、日本製の刷毛が使われています。美術品の保存と修復には、日本の伝統的な技術や道具が用いられています。



日本人の日常生活ではパルプを使った洋紙が使われており、和紙を使うことは少なくなりました。和紙が、世界の貴重な美術品の保存や修復のために使われていることは、日本でもあまり知られていません。和紙作りという日本の伝統技術とともに、貴重な美術品が後世に引き継がれていくことを願います。

(*)

116 古くて新しい和紙

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100547367.pdf>

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

136 団扇と扇子（2022年11月10日）

オルセー美術館が所蔵するエドゥアール・マネ作「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」（写真右）の背景に描かれている円形のものをご存じでしょうか？それは、団扇です。ジャポニスムが流行した時代に、日本美術の影響を受けたマネの作品の中でも、その影響が直接的に表現された作品の一つです。



団扇は、フランス語では扇子と同じ単語で訳されることがあります。どちらも風をあおぐための道具ですが、両者は形が異なります。扇子は折り畳み式であるのに対して、団扇は平面です。風をあおぐ以外の用途として、現代の日本では、扇子は能、歌舞伎や落語などの芸能に使われ、装飾が美しい飾り物の扇子もあります。一方で、団扇は寿司を作るために炊いた米を冷ますときなどに使う調理道具、社名を印刷した広報媒体や夏に浴衣に合わせて身に着ける小道具として使われることが多いです。総じて、扇子よりも団扇の方が、庶民の生活用品として使われていることが多いと言えます。

扇子は、古くは扇と呼ばれていました。扇は、中国を発祥の地とする説もありますが、専門家によれば、日本で生まれたことを示す資料もあるそうです。16世紀に東洋で作られた扇がヨーロッパへ渡り、17世紀以降はヨーロッパでも扇が作られるようになりました。絹、レースや羽根が使われた装飾性の高い扇が作られるようになり、上流階級の女性の装飾品として発展しました（写真右は、19世紀にフランスで作られた扇、ガリエラ宮（パリ市立モード美術館）所蔵）。



一方で、団扇がヨーロッパに大量に持ち込まれるようになったのは、19世紀後半になって、日本が本格的にヨーロッパ各国と交易を行うようになってから

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

です。1872年の明治政府による統計で、団扇が約100万本、扇子が約80万本も日本から海外へ輸出されたとの記録が残っているそうです。おそらく当時のパリの人たちは、日本の団扇や扇子を多く目にしたことでしょう。そのような中で、マネは前出の「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」の中に団扇を描いたことが考えられます。



セー美術館所蔵「シャポンヴァルの風景」。

日本の扇子ではありませんが、オーギュスト・ルノワールは「田舎のダンス」(写真右)の中に扇子を描いたのも当時の



流行を表していると考えられます。カミーユ・ピサロは、扇を描くのではなく、何と扇形のキャンバスに風景を描きました(写真左は、オル

最初にご紹介したマネの「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」に話を戻して、拡大図(写真右)をご覧ください。団扇の柄が濃い茶色のものと黄色いものと、柄の形が異なる二種類の団扇があることにお気づきでしょうか？前者は、京都で作られている京うちわ、後者は千葉県で作られている房州うちわの形をしています。日本では、現在でも地方に



によって特色のある団扇が作られています。余談ですが、マネは、壁に貼り付けた団扇を描きましたが、日本には団扇を貼り付ける習慣はありません。日本には、数多くの扇面を貼る又は描いた屏風があり、マネはこのような屏風を参考にしてこの作品を描いたのではないかと専門家は指摘しています。

団扇と扇子は、形や用途に違いはありますが、どちらも日本文化や日本人の生活の中に欠かせないもので、毎年新作が発売されているロングセラーヒット商品です。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

137 北斎漫画（2022年11月17日）

日本人で最も有名な芸術家と言えば、浮世絵師の葛飾北斎（1760-1849）の名前を挙げる方が多いのではないのでしょうか。北斎が描いた「神奈川沖浪裏」の大胆な構図や威風堂々たる富士山を描いた「凱風快晴」（通称「赤富士」）（*1）は、印象派の画家を始めとする数多くの芸術家に影響を与え、今でも見る人の目を惹きつけて止まない魅力があります。しかし、北斎がフランスの芸術界に影響を与えたのは、富士山だけではありません。今回は、北斎漫画に注目します。

北斎漫画は、漫画という言葉が使われていますが、フランスでも人気の高い漫画とは異なります。北斎による絵の手本帳です。江戸時代の人々の暮らしぶり、花、動物、鳥、虫や魚といった生き物、人の体の動き、風景など様々な事象のスケッチが集められています。当初は一卷で完結する予定でしたが、好評だったため、15巻に及ぶシリーズとなりました。北斎が生きていた時代に絵を学ぶ人の手本として、職人の創作の源として使われたものです。北斎漫画は、時代と国境を超えて、フランスを含めた国外の芸術家や職人にも新たなインスピレーションを与えました。

パリ装飾芸術美術館で、北斎漫画のスケッチから着想を得て制作された作品を観ることができます。一つ目は、エミール・ガレ作の鯉が描かれた花瓶（写真左下）です。写真では分かりにくいですが、北斎が描いた泳ぐ鯉（写真右下）が、花瓶の正面に描かれています。この作品は、1878年のパリ万博に出品されました。アール・ヌーヴォーを代表するガレ（*2）は、日本美術の影響を受けた芸術家の一人です。北斎が描いた鯉は、ダイナミックに動く鯉が描かれて、力強さを与える花瓶を生み出しました。



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

もう一つは、セルヴィス・ルソーです。皿、蓋付きの深皿、鉢、ソース入れ、大皿など 200 余りの食器から成るセットです。ガラス工芸家で陶磁器専門の美術商でもあったフランソワ=ウジェーヌ・ルソー(1827-1890)が、版画家で画家のフェリックス・ブラックモン(1833-1914)に作らせました。この食器セットは、1867年のパリ万博に出品されました。北斎漫画に描かれた鳥、魚、虫や植物をモチーフとして、それぞれに異なるデザインが描かれた食器が制作されました。北斎漫画を見ると、鶏をモチーフとした皿(写真左下)の元となったスケッチ(写真右下)を見つけることができます。北斎漫画に描かれた鶏は、鶏のリアル感もありながら、デザイン性も高いものになっていることが分かります。



北斎漫画にインスピレーションを受けてフランスで生まれたこれらの作品を観ると、北斎のスケッチは、まるで写真のように被写体を生き生きと描いていると同時に、応用が可能なものになっています。ここに、北斎漫画が国や時代を超えて多くの芸術家や職人に愛され、新たな作品を生み出す源となってきた秘密があるのでしょう。

* 1 55 世界文化遺産・富士山

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100188065.pdf>

* 2 82 エミール・ガレと高島北海

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100243770.pdf>

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

153 陶磁器のジャポニスム（その1）（2023年3月23日）

フランスの磁器の産地と言え、リモージュが挙げられます。ここには、世界中から集められた陶磁器を展示するアドリアン・デュブーシェ国立陶磁美術館があります。フランスで作られた陶磁器の中で、日本から影響を受けた面白いデザインのものを見つけましたので、二回に分けてご紹介します。

まず、以前にもご紹介し[セルビス・ルソー](#)です。これは、北斎漫画や浮世絵からとったモチーフをデザインした食器セットです。今回は北斎漫画からとった鶏をモチーフにした皿を紹介しました。ここでは歌川広重の浮世絵シリーズ「魚づくし」の中から、伊勢海老を写した大皿を見つけました。セルビス・ルソーは、1867年のパリ万博に出品されて評判を呼び、1930年頃まで続いた人気シリーズとなりました。



*Série de poissons (Uwo-zukushi),
la langouste et les deux crevettes*
par UTAGAWA Hiroshige, 19^e,
Tokyo National Museum
「魚づくし・伊勢海老、小鰯」
歌川広重 19世紀 東京国立博物館蔵
出典：Colbase (<https://colbase.nich.go.jp>)

この食器セットは、ガラス工芸家で陶磁器専門の美術商でもあったフランソワ=ウジェーヌ・ルソー（1827-1890）が、版画家で画家のフェリックス・ブラックモン（Félix BRQUEMOND）（1833-1914）に依頼して作らせたものです。フランス国立図書館には、ブラックモンが制作したエッチング版画による下絵が残されています（写真右下）。エッチングとは、腐食剤を使って銅板などの腐食性のある素材の表面を削ることで図柄を描き、削られた部分にインクを入れて紙に印刷をする版画技法です。印刷した紙が乾かないうちに陶器に貼り付け、窯に入れて素焼きすると、紙は焼けて陶器には図柄の跡だけが残ります。その図柄に絵付けをしてから、釉薬をかけて焼成したものです。このため、エッチング版画と原画や陶器は、図柄が左右反転しています。ブラックモンが描いた伊



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

勢海老は、左右反転させると広重の浮世絵の中にある伊勢海老にそっくりなことがわかります。

ブラックモンは、エドゥアール・マネやエドガー・ドガといった印象派の芸術家と親交がありました。また、1867年のパリ万博後に立ち上げられた日本美術愛好家による親善団体であるジャングラールの会に参加しました。この団体は、ジャポニスムの普及に貢献しました。陶芸家、版画家、画家、美術商といった9名のメンバーが毎月セーブルに集まり、日本の着物を着て、日本食を箸で食べて、日本酒を飲む夕食会を開いていたと言います。その会合で、ブラックモンは、ルソーと知り合い、日本の意匠の食器セットを製作することになりました。

ブラックモンは、「北斎漫画」の発見者であるという逸話があります。知人の店で見たと日本から送られてきた陶磁器が、北斎漫画の一部や他の浮世絵に包まれていました。ブラックモンは、その芸術的な価値に魅了されて、いち早くその価値を認めました。この話を裏付ける資料はないようですが、北斎が描いたデザインを見事に陶器のデザインに取り入れ、「北斎漫画」の価値を高めたことは間違いないでしょう。

ブラックモンは、1872年にリモージュの陶磁製造業であるアヴィランド社(HAVILAND)と契約し、パリ近郊のオートウイユにあった工房の美術監督を務めました。そこで制作されたものが、セルビス・パリジャン（パリ風セット）（写真下）です。日本の花鳥風月を描いたデザインですが、厚みのあるファイアンス焼（釉薬を使って彩色する陶器の一種）のセルビス・ルソーとは異なり、薄い磁器に繊細な彩色がされています。雨、海辺に生える松、木の枝に止まる鳥、笹の葉など、この美しい皿も北斎漫画からインスピレーションを受けたことが見受けられます。ただし、北斎漫画の中で描かれている橋が虹に代わり、必ずしも北斎が描いた手本をそのまま写したのではなく、ブラックモン自身による創造性が感じられます。ブラックモンが、年月を経て北斎漫画から独自のデザインを生み出していったことが伺えます。



※ 美術館の展示は、変更されている可能性があります。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

154 陶磁器のジャポニズム（その2）（2023年3月30日）

前回に続いて、リモージュのデュブーシェ国立陶磁美術館に展示されている陶磁器の中で、日本から影響を受けたフランスの陶磁器をご紹介します。

セルビス・ルソーを製作したウジェーヌ・ルソーは、1870年代になると、セーブル国立製陶所の装飾画家であったアンリ・ランベール（Henri LAMBERT）（1836-1909）に依頼して、新たなジャポニズムの食器セットを製作しました。それが、セルビス・ランベール（写真右）です。エッチングを使ったセルビス・ルソーとは異なり、こちらはランベールが自ら図柄を描いたものです。木の枝に止まるとんぼを描いた図柄は、いかにも日本的です。でも、どこか日本の浮世絵や陶磁器の図柄とは異なる印象を受けました。何が違うのかしばらく考えて、とんぼと一緒に描かれている木の枝が、梅の枝であることに気がきました。梅は春に咲く花で、とんぼは秋を象徴する虫です。梅の花ととんぼは季節が異なりますので、梅の花が咲く枝に止まるとんぼという図柄は、日本ではあまり想像できません。



陶芸家のテオドール・デック（Théodore DECK）（1823-1891）は、1858年に自身の工房を立ち上げ、日本、中国、ペルシャ、トルコ、アラブなど様々な国から影響を受けた作品を制作しました。デックは、日本の九谷焼からインスピレーションを受けた作品を残しています。九谷焼とは、石川県南部で江戸時代から作り続けられている陶磁器で、色鮮やかな絵付けが施されているのが特徴です。



美術館に展示されている二枚の大皿（写真左下）をご覧ください。どちらがデックの作品で、どちらが本物の九谷焼かお分かりになるでしょうか。右側がデックの作品で、左側が19世紀に作られた九谷焼です。両者を比べてみると、デックが九谷焼の特徴を巧みに捉えてデザインしたことがわかります。明治時代になった1868年に

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

降、政府が工芸品の輸出を後押しし、1873（明治6）年に開催されたウィーン万博を始めとする万博に出品して評価されるようになり、欧米では「ジャパン九谷」の名前で知られるようになりました。デックの作品は1878年に作られたものですので、デックが当時の流行を取り入れたことがわかります。

アルベール・ダムース（Albert DAMOUSSE）（1848-1926）は、セーブルにアトリエを構えて制作活動を行った彫刻家であり陶芸家でした。ダムースは、「日本の風景」というタイトルの皿を制作しました。皿の中に描かれた三つの円の中には、梅のような花、鶴と山が描かれています。葛飾北斎の富嶽三十六景の中で、富士山と鶴を描いた「相州梅澤左」という作品があります。山の形や鶴の姿に共通点が見られることから、ダムースがこの浮世絵を見て参考にした可能性も考えられます。



これらの作品を見ていくと、ジャポニズムが流行した時代に、フランス人の芸術家や職人たちが、日本の浮世絵や陶磁器の意匠から影響を受けて、独自のデザインとして取り入れていったことが分かり、とても興味深いと思います。

※ 美術館の展示は、変更されている可能性があります。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

167 真珠の永遠の輝き（2023年6月13日）

先日、日本の化学者・池田菊苗博士がうま味を発見したことをご紹介しました（※）。池田博士は、日本の特許制度が100周年を迎えた1985（昭和60）年に、日本の特許庁が選んだ「日本の十大発明家」の一人です。この十大発明家の中には、御木本幸吉（1858-1954）もいます。池田博士が特許を取得した1908年から遡った1896年に、御木本幸吉は真珠養殖の技術で特許を取得しました。

真珠とは、貝の体内で作られる宝石です。貝の中に異物が入り込むと、貝は身を守るためにその異物を包み込もうとして、貝殻と同じ成分である炭酸カルシウムが分泌されます。その成分で異物が何層にも包まれて丸く形作ったものが真珠です。色は、クリーム色、薄いピンク、イエロー、ブルー、グレー、ブラックなど様々な種類があります。真珠の主な産地は、日本、中国とオーストラリアの沿岸で、仏領ポリネシアは、黒真珠の世界的な産地として有名です。日本の真珠は、日本近海に生息するアコヤ貝から採れるものが多く、クリーム色や薄いピンク色で小さめの美しい円形が特徴です。



日本では、古代から真珠を利用していたことが分かっています。約5500年前の縄文時代の貝塚から、加工した真珠が発見されました。また、専門家によれば、8世紀に編纂された古事記や日本書紀でも真珠に言及されています。御木本が生まれた志摩国（現在の三重県）は真珠の産地でしたが、19世紀には、真珠の乱獲で絶滅の危機にありました。また、天然真珠は1000個の貝の中に一個あるかないかというくらい大変希少で高価なものでした。

真珠の魅力に一早く気付いた御木本は、真珠の養殖を始めました。度重なる赤潮や資金難に見舞われたものの、1893年に半円真珠の養殖に成功しました。そして、1907年には、御木本の娘婿であった西川藤吉や見瀬辰平らが、真円真珠の養殖に成功しました。

御木本は、ロンドンやパリでも養殖真珠の販路を広げていきました。天然真珠よりも安価で質の高い日本の養殖真珠が、次第にヨーロッパの宝飾市場を席捲するようになりました。1921年に「日本の真珠商人が扱っている養殖真珠は、天然真珠の模造品であり、それを売るのは詐欺商法だ。」と伝える記事が、ロンドンの新聞に掲載されました。パリでは、養殖真珠が本物かどうかをめぐって、裁判に発展しました。この裁判において、研究者が養殖真珠は模造品とは言えな

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

いとする見解で概ね一致したことから、日本の養殖真珠は再び世界市場で流通しました。

しかし、同時期に発生した世界恐慌で、ヨーロッパにおける真珠市場は、壊滅的な被害を受けました。その危機を救ったのが、ガブリエル・シャネル（ココ・シャネル）（1883 -1971）です。シャネルは、女性のファッションに大きな変革を与えました。一つは、スカートとジャケットを組み合わせた機能的なスーツを生み出したことです。また、シャネルは、喪服の色であった黒を女性のファッションに取り入れました。リトル・ブラック・ドレスと呼ばれる黒いシンプルなデザインのドレスに最も合うアクセサリーとしてシャネルが考えたのが、パールネックレスでした。黒いドレスと長く垂れ下がったパールのネックレスの組み合わせは、シャネルを象徴するスタイルの一つとなりました。シャネルは、本物の真珠よりも廉価なイミテーションパールを使い、高価で一部の富裕層しか身につけることができなかった真珠を身近なものにしました。シャネル自身も、しばしばパールを身につけました。イミテーションパールが普及したことで、養殖真珠を含めた本物の真珠の需要が減ったと考える人もいます。しかし、イミテーションパールが普及しなければ、本物の真珠は忘れられてしまい、日本の養殖真珠産業も廃れてしまったかもしれません。イミテーションパールは女性のファッションを豊かにしました。



真珠の輝きは、今も世界中の女性を魅了しています。



ナポレオン三世の皇后
ウジェニーの王冠
（ルーブル美術館蔵）

※ [149 うま味 \(UMAMI\)](#)

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

173 漫画の始まり（2023年7月4日）

フランスは、日本以外で最も多くの日本の漫画が読まれている国だと言われています。フランス語に訳された日本の漫画の数の多さには、いつも驚かされます。今や日本文化を代表するものの一つとなった日本の漫画は、どのように発展してきたのでしょうか。今回は、漫画の始まりについてお話します。

京都にある高山寺には、「鳥獣人物戯画」という絵巻物が伝えられています。12世紀から13世紀の平安時代に作られたと考えられている四巻から成る絵巻物で、国宝に指定されています。絵巻物には画風の異なる絵が描かれていることから、複数の作者が描いた作品が高山寺に集められて、「鳥獣人物戯画」として伝えられているのではないかと考えられています。作者の一人は、当時の高僧で戯画の名手と言われた鳥羽僧正（1053-1140）ではないかと推測されていますが、それを明確に示す資料はありません。作者のみならず、制作された理由など分からないことが多く、謎に満ちた作品です。

「鳥獣人物戯画」は、兎や蛙などの擬人化された動物たちがユーモラスに描かれています。日本の国宝の中で、最も有名で人気のある作品の一つです。保存上の理由から公開される機会が少なく、これが展示される展覧会は、本物を一目見ようと多くの人々が訪れて長蛇の列となります。



鳥獣人物戯画の一場面（写真上）をご覧ください。右端にいる二羽の兎が、兎と蛙による相撲の取組を応援しています。左に目を移すと、蛙に倒された兎がひっくり返っており、それを見て笑い転げている蛙たちが左端にいます。一つの場面で、右から左へとストーリーが展開しています。擬人化された動物が登場して、滑稽な場面が描かれていることから、鳥獣人物戯画は日本最古の漫画と言われることがあります。鳥獣人物戯画には台詞は書かれていませんが、動物たちに台詞の入った吹き出しを付けたら、漫画のように見えてくるのではないのでしょうか。フランスのバンド・デシネはカラーですが、日本の漫画の多くは白黒で描かれていることから、日本人は、墨で描かれた白黒の鳥獣人物戯画と漫画の類似性を見出しやすいのかもしれませんが。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）



別の場面（写真上）をご覧ください。右上には鼻をつまんで水に飛び込もうとする兎、中央には柄杓を持つ兎と猿の背中をさす別の猿、左下には鹿にまたがる兎がいます。川の中で水浴する猿や兎もいます。この場面では、上下様々な位置に動物が配置され、動物たちが描かれている部分の大きさに強弱があります。この場面を見るときに、読み手は視線を上下に動かして、絵を追っていきます。鳥獣人物戯画には、漫画のようなコマはありませんが、1頁が大小様々な大きさのコマで分けられている漫画と共通するものがあるのではないのでしょうか。



一つの作品の中でストーリー展開していくものと言えば、フランスにはバイユーのタペストリー（写真上）があります。1066年のノルマンディー公ギヨーム（後のウィリアム征服王）によるイングランド征服の物語をリネンに刺繍して描いた刺繍画です。左から右へ物語は描かれ、長さは60メートル以上になります。目を奪われる見事な刺繍で歴史物語を描いており、史料的な価値も高い作品です。中世に日本とフランスで、全くスタイルの異なる物語絵が作られたことは、興味深いと思います。

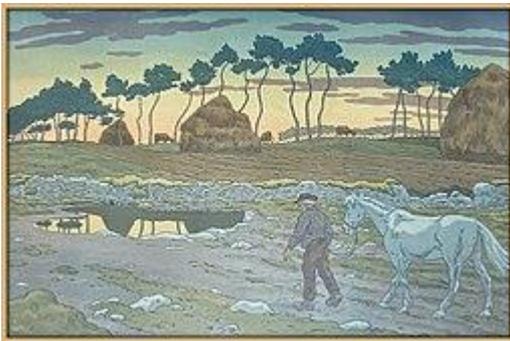
現代の漫画は、明治時代以降の外国からの影響、映画の発明やメディアの発達といった時代の変化とともに発展してきたものですので、鳥獣人物戯画が直接的に現代の漫画を生み出したというわけではありません。しかし、鳥獣人物戯画は、現代の私たちも思わずくすっと笑ってしまう遊び心たっぷりの絵を、中世の人も描いていたことを教えてくれます。鳥獣人物戯画は、読む人を楽しませてくれる滑稽な物語絵という意味で、漫画の始まりと言えるかもしれません。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

181 フランスの浮世絵師 - アンリ・リヴィエール（2023年8月1日）

アンリ・リヴィエール（1864-1951）は、ジャポニスムがブームの時代に活躍したポスト印象派の画家です。リヴィエールは、絵画のみならず、浮世絵から影響を受けた版画も制作したことから、フランスの浮世絵師と言われることがあります。以前に、リヴィエールが葛飾北斎の「富嶽三十六景」にちなんで制作した[エッフェル塔三十六景](#)をご紹介します。また、リヴィエールは、北斎や広重の浮世絵を数多くコレクションしていました。リヴィエールの死後、リヴィエール自身の作品や彼がコレクションした浮世絵は、遺産相続のためにフランス国立図書館に寄贈されたことから、現在はフランス国立図書館の電子図書館ガリカでこれらを観覧することができます。

ブルターニュの自然を愛したリヴィエールは、現地に滞在して数多くの風景を描きました。今回は、リヴィエールが残した作品の中から3作品を選んで、リヴィエールと浮世絵の関係を見ていきます。まず、写真左下のリトグラフの「夕暮れ」と右下の北斎による「富嶽三十六景 程ヶ谷」をご覧ください。リヴィエールが描いたものは日本の風景ではありませんが、不自然なくらいにゆがんだ幹が目立つ木、馬と人が左から右へ動いているという構図が似ています。



次の作品は、リトグラフの「ドゥアルヌネの港」(写真左下)と歌川広重の浮世絵「本朝名所 駿州清美ヶ関」(右下)です。大きく湾曲した入り江の穏やかな波とその奥に並ぶ建物が描かれているところが似ています。ブルターニュ地



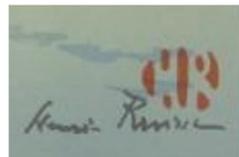
2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

方には、入り組んだ海岸線があります。日本の海岸線も入り組んだところが多くありますので、似たような景色になったのかもしれませんが。この広重の浮世絵は、リヴィエールが所有していたものです。リヴィエールは広重の浮世絵を見ていたのですから、広重の浮世絵を参考にしたと推測することもできるのではないのでしょうか。

三つ目は、木版画「波しぶき」（写真左下）と北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浦波」（写真右下）を比較してみてください。波の形は異なりますが、海は、濃い色、少し薄い色と白色が使われ、大きく分けて三色で色分けされているところが共通します。また、白い波しぶきが、波の激しさを表現しています。「波しぶき」は木版画ですので、浮世絵に近い形で作品を制作していたことが分かります。



リヴィエールの作品を観ていて、もう一つ浮世絵の影響を受けていると思われる点を見つけました。リヴィエールの作品の多くには、署名のほかに「HR」というイニシャルの印が押されています（写真右は拡大図）。ガリ



カのコレクションでは、横向きの楕円形に白抜きの文字が入っているものと右上がりの長方形に赤字の文字が入っているものと二種類あります。これは、落款印に似ています。落款印とは、日本の書画の制作の最後に、作品が完成したことを示すために押印するものです。上の写真の右端は、広重の浮世絵の落款印の一例です。落款印は、朱肉を使います。浮世絵の場合は、作者の雅号に限らず、版元や摺師の印が押されることもあります。リヴィエールがイニシャルの印を押すときには、浮世絵師のような気持ちになっていたのかもしれませんが。

2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）

197 マリー=アントワネットが夢見た日本（2023年9月26日）

以前に[ルーブル美術館の日本コレクション](#)をご紹介ときに、マリー=アントワネットの漆器コレクションについてお話ししました。今回は、このコレクションをもう少し詳しくご紹介します。

ルイ 16 世の妃であったマリー=アントワネット（1755-1793）の人生と王妃が生きた時代の歴史は知られていますが、王妃の日本に対する関心について語られることはあまり多くありません。先の記事でご紹介したとおり、彼女は母マリア・テレジア女王から漆器を贈られたことがきっかけで漆器に魅了されて、彼女自身も漆器をコレクション



したと言われています。ルーブル美術館の工芸部門には、机、水指、香炉、硯箱（写真右）が展示されています。この硯箱も、先の記事に写真を掲載した机や水指と同じく、金箔をふんだんに使った贅沢な漆器です。いずれも 17 世紀前半に日本で作られた漆器と 17 世紀後半にパリの職人による金の装飾を組み合わせた豪華な作品です。これだけ金粉を多用した漆器は、日本でも見る機会があまりありません。その上、フランスの装飾芸術が加わったこれらの作品は、フランスでしか見ることができない貴重な遺産です。



マリー=アントワネットの漆器コレクションを最も多く所蔵しているのは、ベルサイユ宮殿です。王妃のアパルトマン（写真右）の机の上には、金色の犬の入れ物（写真左下）が置かれています。この犬は、2018年にラ・ポスト（フランス郵政公社）が発行した切手のデザインになりました。コレクションには、金色の鶏の入れ物（写真右下）もあります。マリー=アントワネットが、ベルサイユ宮殿のプライベートルームにこれらの動物の形をした漆器を飾り、自分のコレクションを眺めて楽しんでいた姿が想像できます。



2 フランス人を魅了した日本の美と技（芸術編）



セーブル陶磁美術館には、「セルビス・ジャポン」と名付けられた磁器の皿が展示されています（写真右）。これは、専門家によると、マリー=アントワネットがセーブル制作所に作らせたもので、ごくわずかな数の作品しか残されていません。ヨーロッパの王侯貴族にもてはやされた日本の伊万里焼の中でも、17世紀後半に流行し、金彩と青や赤の色絵を使った「金欄手（きんらんで）様式」の影響を受けていることが伺えます。



マリー=アントワネットが生きた時代のフランスでは、当時流行していた「シノワズリー」（日本を含めたアジアのもの）に代表され、ヨーロッパに輸入された漆器や陶磁器くらいしか、日本について知り得る情報はなかったことでしょう。マリー=アントワネットは、遠い異国の日本という国をどのように想像していたのでしょうか。

※美術館の展示は、変更される場合があります。

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

27 国際化する「抹茶 (Matcha)」(2021年1月21日)

フランスで、「抹茶 (Matcha)」という言葉はすっかり定着し、飲み物としての抹茶だけでなく、チョコレート、アイスクリーム、サブレ、マドレーヌ、マカロンなど抹茶を使ったスイーツを見かけます。日本のお茶に関心のある方は、抹茶だけではなく、煎茶や玄米茶もご存じかもしれません。以前は、「緑茶 (thé vert)」で一括りにされていましたが、現在は様々な種類の日本のお茶がフランスに広まっています。



ところで、抹茶がどのようにして作られるかご存じでしょうか？抹茶は、茶葉にお湯を注いで飲む煎茶と同じチャノキの葉が使われますが、抹茶にする茶葉は、収穫前の約1か月間は覆いを被せて日光が当たらないようにします。茶葉を収穫した後、紅茶には茶葉を蒸すという工程はありませんが、摘んだ茶葉を蒸すのが緑茶に共通する特徴です。蒸した後に茶葉を揉みながら乾かすと煎茶になり、茶葉を揉まずに乾かすと抹茶の原料となる碾茶(てんちゃ)になります。そして、碾茶の中に残る茎や葉脈を丁寧に取り除いてから石臼又は機械で挽くと、抹茶になります。煎茶の製造過程で出た粉状のものや煎茶を粉末にしたものも売られています。これらも緑色をした粉末のお茶で、美味しくいただくことはできませんが、抹茶ではありません。抹茶は、日光を遮って育てられた茶葉を使うため、独特の旨味が生まれ、色鮮やかな緑色をしています。

近年の健康ブームに後押しされて、日本のお茶は世界中で需要が高まっています。喜ばしい反面、残念ながら中には粗悪品も「抹茶」と称されて流通しています。現在、国際標準化機構 (ISO) において、抹茶の定義が検討されているそうです。日本の抹茶は、世界で愛される Matcha となって、進化を続けています。



近年の健康ブームに後押しされて、日本のお茶は世界中で需要が高まっています。喜ばしい反面、残念ながら中には粗悪品も「抹茶」と称されて流通しています。現在、国際標準化機構 (ISO) において、抹茶の定義が検討されているそうです。日本の抹茶は、世界で愛される Matcha となって、進化を続けています。

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

45 おにぎりの歴史と未来（2021年4月6日）

パリには、おにぎり屋さんが何軒かあります。おにぎりは、日本古来からあるファーストフードで、日本人にとってはとても身近な食べ物です。おにぎりは、おむすびとも言います。おにぎりの形は三角形が多いですが、俵型や丸型もあり、形は決まっていません。中に入れる具材も自由で、具材が入っていないものもあります。しばしば海苔を巻いて食べます。

おにぎりの原型とも言えるものは、平安時代後期（11世紀頃）に誕生したと言われていています。ご飯を握って丸く固めたもので、紫式部による源氏物語にも描かれています。その後、武士が登場して戦いが増えると、戦場への携行食として広まりました。そして、江戸時代になると、人々がおにぎりを持って旅をするようになりました。歌川広重が1845年頃に描いた浮世絵「東海道五十三次細見図会-藤沢-」には、旅人がおにぎりを食べながら休憩している様子が描かれています。



歌川広重「東海道五十三次細見図会 藤沢」
(国立国会図書館)

日本ではおにぎりは家庭でも作られますが、1970年代にコンビニエンスストアが登場してから、おにぎりを買う人が増えました。現在では、おにぎりはコンビニエンスストアの主力商品で、各社ともおにぎりの商品開発にしのぎを削っています。日本全国のコンビニエンスストアで、毎年数十億個とも言われる数のおにぎりが売られているそうです。



おにぎりの種類は数えきれないほどたくさんありますが、梅干し、昆布、おおか、鮭、たらこなどが伝統的な具材です。2020年6月に行われた調査によると、大手コンビニエンスストア四社のうち三社で一番人気になった具材は、ツナマヨネーズでした。私が、パリのおにぎり屋さんで買ったおにぎりも、ツナマヨネーズでした。ツナのサンドイッチの具材をご飯の中に入れたようなおにぎり

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

す。これは、1983 年にあるコンビニエンスストアの社員が、自分の息子のご飯にマヨネーズをかけて食べているのを見て開発した商品で、ロングセラーになっています。

日本ではおにぎり専門店が増えています。専門店では、米、具材、海苔や握り方にこだわっています。2019 年には、東京で最も古いと言われるおにぎり専門店が、初めてミシュランガイド東京のビブグルマンに選ばれました。おにぎりが、フランス人によって料理のジャンルの一つとして認められた、と話題になりました。

今後フランスでどのようにおにぎりが受け入れられていくのか、注目したいと思います。

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

172 蕎麦とガレット（2023年6月29日）

私が最初にガレットを知ったときは、「フランスには卵やハムが入った茶色いクレープがある。」と驚いたことを覚えています。今では日本でもフランスのガレットは知られるようになりましたが、数十年前まで日本で一般的には、薄い皮でフルーツや生クリームを包んだものをクレープと言ひ、クレープは白い色をしているものだと考えられていたからです。ガレットが蕎麦粉から作られていることを知り、蕎麦粉がクレープのような薄い円形の食べ物になることも不思議な気がしました。なぜなら、日本では蕎麦粉を使った食べ物と言へば、細い麵の蕎麦を思い浮かべるからです。



蕎麦の実は、日本でも古くから穀物の一つとして食されてきました。日本人の主食は米ですが、寒くて米が育たない地域では、蕎麦の実を原料とする蕎麦粉を使ったものが食べられてきました。蕎麦がきと言へて、蕎麦粉にお湯を入れて練って団子状の塊にした食べ物もありますが、現在は蕎麦粉を使った食べ物と言へば細い麵の蕎麦が主流です。最近パリにも数軒の蕎麦屋がありますが、日本ではどこの町にも蕎麦屋があり、家庭でもよく食べられています。

蕎麦は、蕎麦粉と水を合わせて練り、棒を使って伸ばした生地を細く包丁で切り、お湯で茹でていただきます。茹でた麵を水で冷やして、醤油ベースの冷たいつゆにつけて食べる「もりそば」又はもりそばに海苔をかけた「ざるそば」（写真右）と、温かいつゆに入れて提供される「かけそば」など様々な蕎麦があります。蕎麦粉はデンプンが少



なく、生地を薄く伸ばしたときに切れやすいため、多くの蕎麦は小麦粉などデンプンが多い食材をつなぎに使っています。蕎麦粉と水のみで作られる十割蕎麦もあります。手打ち蕎麦の場合、細く長い蕎麦を作るのは職人の腕が問われます。生パスタと同じように、生蕎麦は、乾麵にはない風味を味わうことができます。

現在でも日本では、年越し蕎麦と言へて、大晦日に蕎麦を食べる習慣があります。大晦日に蕎麦を食べるのは、一年の締めくくりに、次の年も蕎麦のように細

3 フランスに広がる日本の味（食文化編）

く長く生活できるようにという願いが込められています。多くの日本人は、蕎麦を食べると、一年が終わったことを実感します。

蕎麦屋で蕎麦をいただくときには、食事の最後に蕎麦湯が提供されることがあります。蕎麦湯とは、蕎麦のゆで汁のことで、とろみがあります。蕎麦を茹でるときに、蕎麦の栄養がお湯の中に流れ出るため、蕎麦湯には栄養が含まれています。蕎麦を食べ終わったら、そばつゆが残っている蕎麦猪口に蕎麦湯を入れていただきます。



フランス北西部のブルターニュ地方では小麦が生育せず、蕎麦を使ったガレットが誕生したとされています。主食である米や小麦の生育が難しい地方で蕎麦を使った料理が生まれたことは、日本とフランスに共通しますが、蕎麦とガレットという全く違う姿の食べ物に発展した違いが興味深いと思いました。



4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

108 ジヴェルニーに咲く日本の牡丹（2022年4月21日）

画家クロード・モネは、ジヴェルニーの自宅の庭に日本風の橋を作り、数多くの睡蓮の絵を描いたことはよく知られています。モネの家と日本とのつながりについては以前にご紹介しました（※）が、今回は牡丹を通じた日本との交流についてお話しします。

中国原産の牡丹は、7、8世紀頃に中国から日本へ持ち込まれました。日本固有の品種も数多く作出され、色鮮やかで大輪の花を咲かせる牡丹は「百花の王」と呼ばれ、長く日本人に愛されてきました。牡丹は、数多くの絵画や焼物の文様として描かれ、文学作品でも語られてき



Porcelaine d'Imari (17^e)
伊万里焼（17世紀）
Sources/出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

ODANO Naotake
小田野直武（1749-1780）

ました。牡丹（Tree Peony）と芍薬（Herbaceous Peony）は、姿が似ていますが、牡丹は低木で芍薬は草に分類されるという違いがあります。

日本の浮世絵を蒐集し、日本文化の影響を受けたモネは、日本の美術品を通して牡丹の花の美しさに惹かれていきました。モネは、1883年に日本にいたドイツ系アメリカ人園芸家兼貿易商を通じて牡丹の苗を取り寄せて、自分の庭に植栽して育てました。そして、1887年に絵画「牡丹」というタイトルで、萱の屋根に守られた牡丹（写真右）の絵を描きました。しかし、そ



の後は長い年月が経つ内にモネの庭から牡丹は姿を消してしまいました。そのことを残念に思った前庭園長が、牡丹の花が咲くモネの庭園を復元できないかと考えていたところに、日本一の牡丹の産地である島根県大根島の日本庭園由志園から、牡丹の苗を寄贈するとの申し出がありました。そして、約130年ぶりに日本の牡丹がモネの庭園に植栽され、日仏外交関係樹立160周年で開催されたジャポニスム2018の機会に艶やかな牡丹が咲く庭が蘇り、文字通りに日仏両国の友好記念行事に華を添えました。

4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

2021年12月に、庭園を更に美しく彩るために、再び日本庭園由志園から牡丹の苗が輸送され、庭園に植栽されました。庭師の方々の日々の丹念な手入れのおかげで、苗は順調に成長しています。天候によりますが、ジヴェルニーでは、4月の第四週頃に牡丹の花が見頃となると予想されています。



モネが愛したジヴェルニーの庭で、100年以上の時を経て再び日本とフランスの交流の証となった牡丹の花をご覧になってはいかがでしょうか。



※牡丹の花の写真は、2018年に撮影されたものです。

(※) 19 ジヴェルニーのモネの家 (2020年12月17日)

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100127308.pdf>

4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

112 日本のアイリス—ハナショウブとシャガ（2022年5月19日）

アイリスは、ギリシャ神話に登場する虹の女神イーリスが名前の由来となっています。ジャーマンアイリス（学名 *Iris germanica*）、ダッチアイリス（学名 *Iris hollandica*）などヨーロッパの国名が付いたアイリスを多くみかけますが、アイリスはヨーロッパだけのものではありません。実は、「日本のアイリス」もあります。

日本を代表するアヤメ属の花は、アヤメ（学名 *Iris sanguinea*）です。カキツバタ（学名 *Iris laevigata*、仏語では *Iris d' eau japonais*）は、フランス語では日本にゆかりのある花であることがわかります。カキツバタと言えば、尾形光琳（1658-1716）が描いた「燕子花図」（写真下、一部のみ）が有名です。光琳の代表作で、国宝に指定されています。



そして、日本のアイリスと言えるのが、ハナショウブ（学名 *Iris ensata*、仏語で *Iris du Japon*）です。ハナショウブは、アヤメやカキツバタと同じく、日本、朝鮮半島や東部シベリア地方を原産とする花です。右の写真は、5月初旬にパリ植物園（Jardin des Plantes）で撮影したものです。写真では分かりにくいですが、ハナショウブの花びらの中央部には、黄色い斑紋が入っていることが特徴です。ただし、ダッチアイリスも、花びらの中央部が黄色くなっています。花びらや葉の特徴、生育するのが水中か陸地か、開花時期など、品種によって違いはありますが、アヤメ属の花は似たような姿のものが多く、見分けることが難しいです。



4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

さらに悩ましいのが、日本の名前がついたアヤメ属の花が他にもあることです。それは、小ぶりの可愛らしい花で、日本でもパリでも見かけるシャガです（写真右）。この花の学名は、*iris japonica*です。18世紀か19世紀に日本に来たヨーロッパの植物学者が、この花を *iris japonica* と名付けてヨーロッパへ持ち帰ったことから、現在ではフランスでもシャガを見られるのかもしれませんが。



ハナショウブは、パリでは、パリ植物園のほか、ブローニュの森にあるバガテル公園で観ることができます。バガテル公園はバラが有名ですが、アイリス庭園もあります。ヨーロッパ原産のアイリスは5月が見頃で、ハナショウブは6月初旬に見頃を迎える予定です。アイリスの仲間は種類が多く、色や花びらの形も多様で、優美な花を咲かせます。美しい花を愛でるときに、その由来や学名といった難しいことを考える必要はありませんが、そこで目にするアイリスは、もしかしたら日本のアイリスかもしれません。事実、アイリス庭園の中央部にある水が張られたスペースには、2001年に静岡県河津町に河津バガテル公園が開園した際に、河津町からパリ市へ寄贈されたハナショウブ（写真右は2021年に撮影されたもの）も植えられています。この公園には、「日本の鏡」



（miroir japonais）という名の池があります（写真下）。バガテル公園は、その歴史を18世紀に建てられた城と庭園に遊ることができるヨーロッパ式庭園（公園内のバラ園は1905年に開園）ですが、密かに日本の名を持つものが隠されています。



4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

124 モレブリエ東洋公園（2022年8月18日）

先日、フランスには美しい日本庭園がいくつもあることをご紹介しました（※）。パリから約360キロ南西に位置し、ナントやアンジェから1時間程度の距離にあるモレブリエには、ヨーロッパで最大級の日本庭園があります。

モレブリエには、17世紀にコルベール城が建てられました。19世紀末にここを買い取った所有者は、娘婿であった建築家のアレクサンドル・マルセルに城の改修を依頼しました。1900年のパリ万国博覧会でカンボジアのパビリオンにあった「世界の塔」を担当したマルセルは、東洋の影響を強く受けていた建築家でした。マルセルは、1899年から1913年にかけてここを整備して、日本風の庭園を造りました。庭園は荒れ果てた時期もありましたが、1982年に庭園を保存するための協会が立ち上がり、現在はモレブリエ東洋公園として一般公開されています。

29ヘクタールに及ぶ公園の敷地のうち、12ヘクタールが日本庭園となっています。池のほとりには日本庭園の象徴とも言える石灯籠や太鼓橋があり、それらを見ているとフランスにいることを忘れてしまいます。しかし、視線を遠くに向けると、日本庭園と庭園に隣接する城を同時に目にすることができます。日本では見たことがない形に切り込まれた松の木もあり、日本人にとっては懐かしさと新鮮さを感じることができる庭園です。



6月1日、ここで欧州日本庭園協会の設立総会が行われました。この協会は欧州中の日本庭園をネットワーク化し、庭師や日本庭園を愛する人々を集め、情報共有や庭師の技術指導を行い、欧州にある日本庭園をより美しく永続的に維持管理し、日本庭園を通じた日仏交流を推進していくことを目的として立ち上げられました。フランスには日本的な雰囲気のある庭園が数多くありますが、どのように管理したらよいかわからない所有者が多くいると聞きます。今回



4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

の総会に合わせて、日本から参加した日本の専門家や庭師が、フランスの庭師に石組みや剪定の技術指導を行いました。また、日本人庭師がこの公園の中で最も神聖な場所だと指摘した場所には、フランス人庭師がしめ縄（写真上）を作りました。しめ縄とは、神道で神聖な区域を区別するために用いられるものです。

前回ご紹介した記事（※）で、日本庭園の明確な定義はないとご説明しました。フランスと日本の庭師が直接的に交流して技術の共有が進めば、日本庭園の考え方について共通理解が生まれることでしょう。フランスと日本では植生が異なりますので、必ずしもフランスでは日本と全く同じ姿の庭園にはなりません。日本とヨーロッパの違いは、日本の庭師にも良い刺激を与え、日本にある日本庭園を新鮮な目で見直すことにもなります。ヨーロッパにある多くの日本庭園がネットワーク化されて日仏間の交流が進み、日本とヨーロッパの双方の日本庭園が発展していくことを願っています。

※ 113 日本庭園

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100348711.pdf>

※※ European Japanese Gardens（英語版）

https://european-japanesegardens.fr/index_en.html



4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

163 ヨーロッパ人を魅了した日本のユリ（2023年5月30日）

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパで日本のユリが人気を集めました。ヨーロッパで日本のユリが注目されたのは、日本がまだ鎖国をしていた19世紀前半に、日本の唯一の対外的な窓口であった長崎の出島でオランダ商館医を務めたシーボルト（1796-1866）が、日本のユリを持ち帰ったことがきっかけでした。1873年に行われたウィーン万国博覧会に日本のユリが出品され、一気に人気が高まりました。畑和助が1889年のパリ万博の際にトロカデロ公園に作った日本庭園の中でも、ユリが展示販売されたのかもしれませんが（※）。ブルボン王家ではフルール・ド・リスが使われ、絵画の中では聖母マリアを象徴するものとして白百合が描かれていますので、ヨーロッパにも古くからユリが存在していたはずですが、なぜ、ヨーロッパで日本のユリが人気になったのでしょうか。

右の写真は、14世紀にロヒール・ファン・デル・ウェイデンが描いた「受胎告知」（ルーブル美術館所蔵）です。絵画の左下に描かれている白い百合は、小ぶりの花です。これは、ヨーロッパ原産のマドンナリリー（学名：*Lolium candidum*）と言われる種類です。



それと比べて、日本のテッポウユリは、大ぶりの花付きです。左の写真は、園芸用に改良された現代のユリですが、おそらく19世紀に日本からヨーロッパへ持ち込まれたユリも、その美しさでヨーロッパの人々を魅了したことでしょう。（ちなみに、フルール・ド・リスは、直訳すると「ユリの花」ですが、実際にはユリではなくアイリスの花だそうです。）



国家の近代化を推し進めていた明治時代（1868-1912）、ユリの球根は、日本にとってヨーロッパとの貿易における主力輸出品の一つでした。日本の国立公文書館アジア歴史センターが、欧米で日本のユリが人気を集めていたことを示す資料を公開しています。ユリの球根の国別輸出個数を示した資料によると、1906（明治39）年に日本から海外へ輸出されたユリの球根の数は、合計約1213万個でした。その内の9割近くはアメリカとイギリスへ出荷され、フランスには、64,010個の球根が輸出されたことが記録されています。ユリの貿易が盛んに行われ、ユリは日本の経済力向上に大きく貢献しました。

4 フランスで愛される日本の花と緑（植物編）

日本では古くからユリ根（写真右）を食材として使ってきました。日本に自生するユリには、球根が食用に適する種類があります。現在は、ユリ根のほとんどは北海道で生産され、主に関西地方へ出荷されて、高級食材として正月料理や料亭で使われています。ユリ根を生産するには、畑に植え付けるまで3年、畑に植えてから3年で、合計で6年かかります。一度ユリ根を育てた畑は、7年も休ませる必要があり、栽培するのにとても時間がかかります。ユリ根は、炭水化物やたんぱく質のほか、カリウム、葉酸や食物繊維なども含む栄養価の高い食材です。



ユリは、美しい花が人々を魅了してきただけでなく、日本とフランスの交流に一役買った時代があったのです。

※ [156 ジャポニスム時代の日本人庭師一畑和助](#)

5 フランスを愛した日本人（人物編）

76 グレー＝シュル＝ロワンの黒田清輝通り（2021年8月26日）

「日本近代洋画の父」とされる黒田清輝(1866-1924)は、1890年7月から1892年12月までの約2年半、日本人として初めてグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。この小さな村には、黒田清輝通り (Rue KURODA Seiki) があります。パリから南東に約80キロの距離にあるグレー＝シュル＝ロワンには、セーヌ川の支流であるロワン川が流れ、穏やかな光が注がれる美しい風景が広がっていたことから、アメリカ、イギリスや北欧出身の芸術家が滞在していました。黒田はここで、他国の画家たちとの交流しながら、光を活かした絵画を学びました。



KURODA Seiki
(National Diet Library, Japan)
黒田清輝（国立国会図書館）

黒田は、芸術家が出入りしていたオテル・シュヴィヨン (Hôtel Chevillon) に滞在し、1891年に初めてサロンに入選した《読書》を描きました。この絵のモデルは、この村に住んでいたマリア・ビヨー (Maria BILLAUT) という女性です。二人は恋仲にあったと言われています。オテル・シュヴィヨンは、1988年からはスウェーデンの文化財団（グレー＝シュル＝ロワン財団）が所有し、アーティスト・レジデンスとして運営されています。



Lecture, 1891, musée National de Tokyo
《読書》1891年 東京国立博物館蔵
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

黒田の後、1920年代までの間に、浅井忠、久米桂一郎、和田英作、児島虎次郎、安井曾太郎を始めとする何人もの画家がグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。これらの画家たちは、洋画の発展に貢献しました。グレー＝シュル＝ロワンは、黒田にとって「心のふるさと」であり、「洋画家の聖地」と呼ばれるほど多くの日本の画家たちに愛された村でした。

2000年にグレーで活動した画家の作品約150点を集めた「グレー村の画家たち」展が日本で開催されました。これがきっかけとなり、2001年10月7日、グレー＝シュル＝ロワンにフランスで初めて日本人の名を冠した「黒田清輝通り」が誕生しました。フランスの地図に記載された日本人の名前は、19世紀末以降の日仏文化交流の証です。

5 フランスを愛した日本人（人物編）



© Jean Le Vot



5 フランスを愛した日本人（人物編）

88 レオナルド・フジタが暮らした最後の家（2021年11月18日）

エコール・ド・パリを代表する画家のレオナルド・フジタ（藤田嗣治）（1886-1968）は、フランスで活躍した日本人の中で最も有名な人物の一人です。フジタは、日本とフランスのいずれにおいても戦争を体験し、生涯で5人の女性を愛し、晩年にはフランスに帰化しました。フジタが妻の君代とともに生活した最後の家が、パリ中心部から南西約30キロに位置するヴィリエール＝バークル（Villiers-le-Bâcle）に残されています。



Nu couché à la toile de Jouy
(Musée d'art moderne de la ville de Paris)
寢室の裸婦キキ（パリ市立近代美術館蔵）

藤田が初めてフランスの地を踏んだのは、1913年でした。藤田のフランス生活は、パリのモンパルナスから始まりました。そこで、当時モンパルナスで生活していた巨匠のパブロ・ピカソや親友のモディリアーニと出会うという幸運にも恵まれました。しかし、第一次世界大戦が始まり、フジタの画家としてのキャリアは困難なスタートとなりました。最も苦しいときは、暖をとるために自ら描いた絵を焼いてしまったこともありましたが、絵を描くことを止めることはありませんでした。フジタは自分なりの独特のスタイルを求めて1919年に初めて裸婦を描き、これが「乳白色の肌」と呼ばれたフジタの作品の始まりとなりました。次第に画家としての地位を認められ、1929年に完成したパリ国際大学都市の日本館に、「欧人日本への渡来の図」と「馬の図」を収めました。
(<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100197262.pdf>)

第二次世界大戦が勃発し、1940年に藤田はフランスを離れざるを得なくなり、日本に帰国しました。しかし、戦争で揺らぐ日本社会に馴染めず、フジタは1950年にフランスに戻りました。フランスに骨を埋める覚悟を決めたフジタは、1955年にフランス国籍を取得して日本国籍を抹消しました。1959年にはランス大聖堂で受洗し、レオナルド・ダ・ビンチにちなんで、洗礼名をレオナルドとしました。

そして、フジタは、1960年10月、73歳の時にヴィリエール＝バークルに一軒家を購入し、翌年に転居しました。この近くにあった友人の家を訪ねた際にこの地域を気に入ったことから、知人に依頼してこの地域で家を探しました。静かな環境にある住居兼アトリエで、フジタは制作に没頭しました。このフジタの家は、

5 フランスを愛した日本人（人物編）

当時のフジタ夫妻の生活の様子を残した姿で一般公開されています。一階 (rez-de-chaussé) と二階 (1er étage) が住居で、屋根裏のアトリエにはフジタが使った筆とパレット、日本語が書かれたシールが貼られた顔料の入った瓶やミシンなどが残されています。フジタが、1966年にランスに建てたフジタ礼拝堂（平和の聖母礼拝堂）に描かれたフレスコ画の習作を見ることができます。

フジタの家にいると、まるでフジタがつい昨日までここで絵を描いていたような感覚を覚えます。フジタの家で、晩年のフジタがどのような思いで絵画を制作していたのか、想像してみてもいいのではないでしょうか。



フジタの住居兼アトリエを管理するエソンヌ県議会 <http://www.Essonne.fr>（仏語）
フジタ礼拝堂 <https://musees-reims.fr/fr/musees/la-chapelle-fujita/>（仏語のみ）



5 フランスを愛した日本人（人物編）

126 グラン・モランを描いた佐伯祐三（2022年9月1日）

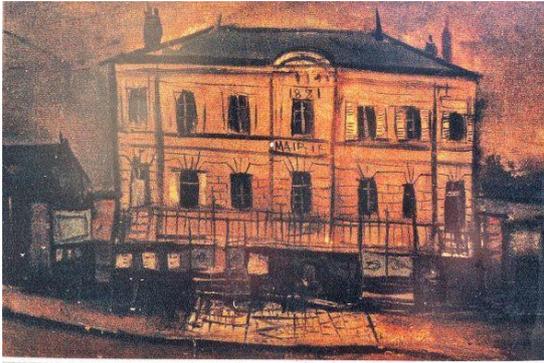
パリから東へ50キロほど行くと、多くの画家が愛したグラン・モラン川流域ののどかな景色が広がります。ヴィリエ=シュル=モランやサン=ジェルマン=シュル=モランには、グラン・モラン川流域の風景に魅了された芸術家や彼らが描いた絵を紹介するパネルが立てられており、アート散策を楽しむことができます。このパネルの中で、佐伯祐三（1898-1928）がこの場所を描いた作品も紹介されています。

佐伯祐三は、東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業後、1924（大正13）年にパリへ来ました。フォービズムの画家であったモーリス・ド・ヴラマンク（1876-1958）と出会い、ヴラマンクの影響を強く受けました。佐伯が描いた風景画は、モーリス・ユトリロ（1883-1955）の影響も受けていると言われています。佐伯は、パリに長く滞在することを望んだものの体調が優れず、1926（大正15）年に日本へ帰国しました。フランス滞在を強く望んだ佐伯は、1927（昭和2）年夏に再び渡仏しました。しかし、1928（昭和3）年春頃から再び肉体的にも精神的にも衰弱し、その年の8月に30歳の若さで、フランスで生涯を終えました。

佐伯が描いた風景は、現在でも残っています。彼の作品『モランの寺』（写真左下）はサン=ジェルマン=シュル=モランにあるサン=ジェルマン教会をモデルにしています。また、もう一つの作品である『ヴィリエの市役所』（写真は『モランの寺』の下）は、ヴィリエ=シュル=モランの市役所を描いたものです。市役所の建物は新しくなっていますが、現在も当時と同じ場所にあります。1928年2月にヴィリエ=シュル=モランに滞在した後に佐伯は体調が悪化したので、これらは彼がパリ以外の場所で描いた最後の作品かもしれません。



5 フランスを愛した日本人（人物編）



1 Tazujita Pr. (1898-1929), *Mairie école de Millors, 1928, huile sur toile, 53x72, université de Konan (Japon)*
recherches scientifiques 2003-2004 de T. Tsujita Pr. émérite, avec fond K. Taira



佐伯は、画家として活動したわずか6年のうち半分をフランスで過ごしました。グラン・モランでは、一世紀前に佐伯が残した絵画を通して、現在とあまり変わらない当時の様子を知ることができます。川の流れと同じように、グラン・モランでは時もゆっくりと流れているように感じます。

佐伯は結婚後、現在の東京都新宿区に住居兼アトリエを構え、日本にいた間はそこで生活しました。アトリエ部分が、現在は佐伯祐三アトリエ記念館として一般公開されています。短かった佐伯の人生ですが、日本とフランスに彼の足跡を今に伝える場所が残されています。





日本人が描かれたステンドグラス、聖マドレーヌ教会（モンタルジ）

2023年12月

在フランス日本国大使館 広報文化部文化班